

# PATIO

TAKAOKA ART MUSEUM NEWSLETTER 高岡市美術館ニュース 2003年3月20日発行

パティオ

17



長谷宗悦 2002年  
木／焼成・アクリル  
219.5×305.6×251.5cm  
photo by 小杉善和  
(「長谷宗悦 1983-2002」展p.2参照)

- 【Exhibition report 1】長谷宗悦 1983-2002 (舟塚雅恵) ..... p.2  
【Exhibition report 2】澤乃井 櫛かんざし美術館コレクション  
〈髪飾りにみる遊び心と粋—江戸から昭和—〉展 (瀬尾千秋) ..... p.4  
コラム【学芸室から】博物館員の倫理 (山本成子) ..... p.6  
【Information】高岡出身の版画家・南桂子 ..... p.6

長谷宗悦 1983-2002



会場風景（企画展示室1）

2002年9月から10月にかけて、当館では高岡市出身の彫刻家・長谷宗悦（はせむねよし）の作品を紹介する展覧会を開催した。長谷宗悦は、1954（昭和29）年高岡市に生まれ、富山県立高岡高等学校卒業後、東京芸術大学美術学部彫刻科、同大学院彫刻科を修了した。初期から一貫して、木を素材にした彫刻作品を制作している。

今回の展覧会では、東京芸大修了後間もない1983（昭和58）年に制作された初期の作品から近年にいたる代表作に、未発表の最新作を加えた22点を展示した。作家にとって郷里での発表は、1983（昭和58）年、初個展であるギャラリー山口での発表作を中心として、同年、郷里・高岡市立博物館で作品を発表して以来ちょうど20年にあたる。本展では長谷の20年目の軌跡を紹介した。



長谷が本格的に作家活動を始めたのは1980年代はじめてである。初期には細い木片をはりあわせて、脚をつけた小さなやぐら風の作品を発表した。長谷が注目をあびはじめたのは、1980年代後半に制作された大型の彫刻作品

からだ。表面を黒く焼き焦がしたり、彩色や線刻を施したりした、重量感ある木材を組み合わせることによって、巨大なドーム状の形態や、ピラミッドを思わせる台形の構築物を1、2年ごとに発表する。空間を威圧するかのような力強さをもったものであった。

それら作品はそれぞれ、彫刻を考えた彼の思考の軌跡そのものであった。その基底にあるのは、彫刻は量塊による表現ではなく、視覚効果による認識であるという考えである。それは、彼が当初グラフィックデザイナーを志していたことによるのかもしれない。その軌跡は、1998年に板面をよこに組み合わせた幅10メートル近い彫刻でひとつのターニングポイントを迎える。板という平面による組み合わせが、いかに彫刻作品になり得るのかという挑戦であった。



以後は廃材を組み合わせたレリーフの仕事に着手していくことになる。立体から平面へ解体された素材ひとつひとつを検証し、レリーフへと再構築する。その取り組みは1996年まで続いた。そして1998年につりさげ形の彫刻を発表した後、しばらく発表を休止する。今回の展覧会における新作発表

は、作家にとって4年ぶりのものである。

今回の作品にも一切タイトルが付けられていない。「無題」というタイトルも、付けられたとたん、そこには無題という意味が生じるのだと長谷は言う。何もない状態で作品に出会ってほしいとの思いがある。

新作にはこれまでと同様に廃材が使われている。打ち捨てられるはずだった細々した木材は、作家によって新たな命をふきこまれ、まるで私たちに手を差し伸べるように存在している。ちいさなかけら各々が、時間を経てたどり着いた形そのままに提示されるが、そこには紛れもなく作家による取り合わせの意志決定が介在している。それが創意なのだと言ふ。新作では一つ一つの部分は外へ外へと向けられ、これまで平面の仕事で繰り返し行われてきた、単一の構成の組み合わせが全体の構築につながるという取り組みが、ここにきて昇華し、複雑な部分の一つ一つがひとつのかたちへと導かれたのだった。



長谷のアトリエは、富士五湖が点在する山梨県南部、富士山の北側山麓にある。アトリエの付近には、富士山噴

火時の溶岩流によってできた本栖湖、精進湖があり、広大な青木ヶ原の樹海が広がっている。人類が誕生するはるか以前に形成された太古の昔そのままの自然が、今もなお開発の手を逃れて、多く残された場所である。作家のアトリエがある標高1200メートルのその場所は、富士山一合目の少し手前にあたり、一面背の低いカラマツで覆われている。夏は涼しく過ごしやすいが、一方で、冬には時に氷点下20度に冷え込むこともある大変厳しい自然環境の地である。この地にアトリエを移して十余年、長谷は厳しい自然のなか人間の小ささを痛切に感じるようになったという。

住まいのある東京とアトリエのある山梨を往復しながら、彼はここで4年間発表のあてのないまま制作してきた。4年間は、作っては壊し、作っては壊しの連続であったという。発表を目的とせず制作されたそれらの作品は、今は存在しない。写真でのみ残されている。

4年というのは決して短い時間ではない。ともすれば現代の情報化社会では存在自体も消えてしまいかねない。しかし、長谷は長く沈黙し、そしてついに今回の作品が生み出されたのである。

日本の現代美術もまた、今やコマースリズムと結びついて、大量生産・大量消費、作品さえも速いスピードで消費されていく。しかし、長い時間をかけて、自らの制作や内面に真摯に目を向け続ける美術作家たちも多くいることを忘れてはならない。そして、そのような作家たちの仕事を紹介していくのも美術館の使命である。

※この展覧会は平成14年9月14日(土)から10月27日(日)まで開催されました。

(舟塚雅恵・学芸員)



会場風景 (企画展示室2)



会場風景 (企画展示室3)

※写真はすべて小杉善和撮影